在日二世　康（カン）　東勲（ドンフン）さんの語る戦争体験

思い出したくない、嫌な蘇我町空襲の生臭い悲惨さを垣間見た話

１　空襲警報で逃げまどう、辛い明けがたまでの体験

　１９４５年６月１０日の夜中、日立航空機千葉工場の不気味な空襲警報のサイレンにたたき起こされ、私は枕元の防空頭巾を被り、家族と共に近所の頑丈で大きな防空壕に所狭しと入らせてもらった。

　暫くすると爆撃機のごう音と共に防空壕は地雷のようにグラグラッと揺れ動き、不安そうな声でコソコソとつぶやいていた時、「防空壕は危ないから、早く山の方へ逃げろ!!」と大声で怒鳴られ、みんな急ぎ足で大巌寺方向に向かって行った。

　蘇我駅前を通り過ぎ蘇我踏切（現在の今井路線橋）の手前にさしかかった時、今度は「早く隠れろ！」と言われ、みんな思い思いに線路わきの資材置き場のぬかるみの中へ潜り込むと、遠くから「ドスン、ドスン」と鈍い音と地響きに驚きおののき、周りは今まで何事もなかったかのように「シーン」と静まり返って、固唾を呑み、息を殺した異様な重苦しい雰囲気と、外の様子が気がかりだが何も言えない不安な長い一時が過ぎた。

　そんな時ある人が勇気を出して外に出たとたん、「なんだ！これは！どうしたんだ！」と訳の分からない驚きの声に、大人たちの一部が外へ出たのに続いて、日立航空機千葉工場の消防車の手動サイレンが、蚊の鳴き声のように「ウ～ウ～ウ～」と弱々しく聞こえた。
大人たちは「解除だ！解除だ！」と叫びつつ外へ出たので、私たちも続いて出た。

　周りはうす暗く、外は重苦しい鉛色だった。よく見ると電線がちぎれ、ぶら下がり、蜘蛛の巣のように散らばり、剝がれ飛ばされたトタンや、倒れかけた電柱などが道を塞いでいた。

　目が慣れるにつれ、大人たちの顔は黒く汚れ、ズボンは泥水につかったままで、顔や衣類の汚れは子どもよりひどかった。ともかく「命拾いしたんだ！」とお互いに励ましながら、つまずかないように、足元に注意しながらノロノロとみんな家路を急いだ。

２　蘇我空襲の多くの死傷者たちの悲惨な姿は、今も鮮やかに脳裏に焼き付いている

　家に帰るやいなや、近所の役人が来て「勤労奉仕だ！付いて来い！」と、父をどこかに連れて行った。

　蘇我１丁目から２丁目付近が明け方、B29 の爆撃で家屋が滅茶苦茶に破壊され、多数の死傷者救援活動と後片付けに、多くの朝鮮人が飯場から動員されたと夜になってわかった。

　その日の昼ごろ、今井町、蘇我町一帯の国道（現在、県道）は通行止めにされ、付近の人たちには「外に出るな！」と言われたが、それを無視して道路沿いの今井神社鳥居（日立航空機千葉工場の正門入口の前）の後ろの茂みの樹に登り身を隠して、「何事があるのかな？」と、目を凝らし、息を止め静かに様子を探っていた。

　なんと、リヤカーに座ったまま、腕のないような人、頭や顔、首、背中、足を赤黒い包帯や手ぬぐいなどでグルグル巻いた人たちの、痛々しい姿に恐ろしくて「ゾッ」と身ぶるいした。

そのあと、大八車、牛車、馬車には、お尻のあたりが血で染まりふくらはぎの肉がえぐり取られ、血がにじみ出ている負傷者たちが横たわった姿で、次々と正門近くの病院に運ばれた。
ただ無残さに、驚きと恐ろしくもあり、気の毒で鳥肌が立ったまま、しばらくの間まともに見られなかった。
今度は次々と、死体にムシロやゴザを被せた何台もの牛馬車が続けて五田保の方へ行ったので、福正寺（今井町）の火葬場に運ぶんだなと思った。
「数日間 、火葬場の低い煙突からは嫌な匂いとうす黒い煙が、毎日南風にのって五田保飯場に流れ、漂う臭い匂いで飯も食えなかった」とか、夜は「火の玉がうようよ浮いていて、怖い思いをしながら立小便をした」と戦後飯場の青年から「お化けばなし」を随分と聞かされ、挙句の果てには度胸試しに行かされた。この火葬場の跡には現在、慰霊碑が祀られている。
数日間の勤労奉仕を終えて帰ってきた父親は、蘇我町一帯の爆撃で滅茶苦茶に壊された家々のがれきの中から多くの怪我人を助けだしたり、死体を指定の場所に集めたり、壊れた家のがれきの後片づけをさせられた。爆撃の目標が二基の「ガスタンク」なのに、一発も当たらず「タンク」から離れた、周辺の民家がほとんどやられた。戦争は酷いものだ！こんなひどいとは知らなかった。今の話を忘れるなと懇々と悟らされた。
現在の川崎町、JFE 東日本製鐵所正門近く（今井町３丁目）から蘇我２丁目のはずれの間の川沿いには、１０メートルぐらいの爆弾の穴が二個ずつ並び、雨水で無数の池になっていた。海で遊んでの帰りには、そこで体を洗ったりして遊んだ。現在は国道３５７号線。

命拾いした機銃掃射の恐ろしさの思い

一回目の艦載機の機銃掃射は、蘇我国民学校２年生になった１９４５年５月初め頃、学校からの帰り道、仲間に「日立航空機千葉工場の分場の日立会館で映画を見られるので行かないか」と誘われて、三人は恐る恐るついて行き、日本軍が勝っている勇ましい空中戦などの激しい戦いの名場面に、私も従業員と共に「ワーッ」と歓声をあげて、興奮冷めやらぬまま家路を急いだ。
蘇我踏切（現在の今井路線橋）の４００～５００メートル手前を、午後三時頃三人で、「日本軍はすごく強いな！」と、戦闘場面を思い出しそれぞれ感想を話しながら歩いていたら、後ろから「脇へ伏せろ！」と言う大人の大声に、何事かと驚き、振り返り見えたのは、東の方から敵の艦載機が急降下してきたので、みんなびっくりして、それっと言わんばかりに麦畑になだれ込み、身をちぢめ腹ばい耳を両手で塞ぎ、死にたくない一心で息を殺していたら「ザザザッ…」とごう音と同時に、横の砂利道は先が見えないぐらい砂煙がもうもうと立ち上がり、しばらくの間は身動きができなかった。
艦載機は、日立航空機千葉工場の方へ急上昇したその時、操縦士はこちらを見ていた。私たちは互いに「命拾いしたな」と喜びながら、「敵の顔を見たか」、「目と目が合った」と話し合ったのが、昨日の出来事のように今も生々しくよみがえる。
二回目の機銃掃射も五月半ばごろの昼下がりの二時から三時ごろ、蘇我踏切を仲間三人がそんなこんな話をしながら渡り切った所で、道の脇から「早く、ここへ隠れろ！」と大人に怒鳴られ、横の小屋に三人が飛び込むと同時に、「ザザザッ…」と艦載機の機銃掃射を受けたが、私たちとそこのおじさんたちも無事だったし建物も変わりはなかった。
おじさん夫婦に「にしら（お前たち）何処の誰じゃ」と聞かれ、どこそこの誰々だと答えた。「気

を付けて帰れ！道草すんでねーぞ！」と言われ、走って帰った。その時の艦載機も東の方角から西の方向に飛んで行った。

二、三日して学校の帰りに、お礼にと小屋のおじさんの所に立ち寄ったら、夫婦は笑いながら「ほれッ！これを見てみろ！」と、この間機銃掃射の薬莢が４０～５０個入ったバケツを地面にひっくり返して見せてくれたのにはびっくりした。

物珍しく見入り、あれこれと触ったりした。大人の中指ぐらいの薬莢を４、５個もらい持ち帰り、親にひどく怒られた記憶は今でも鮮やかに残っている。

それ以降、親は私の通学路は危険だからと言って変更させた。

その頃日立航空機千葉工場内で働いていた、飯場の朝鮮人が負傷したという話を終戦直後に聞いた。確認されたのは一名。

夜空に繰り広げられた米軍の東京空襲を窓辺で見た

１９４５年３月１０日国民学校１年生の時、日立航空機千葉製作所内の飯場で夜中、父に叩き起こされるまま窓辺に目をこすりこすり背伸びして前の海を見ると、下は真っ黒で上は真っ赤に燃えていた。

真っ赤な夜空には、鉛筆のキャップ程の銀色に輝くＢ２９が編隊で後から後からと、炎の中をゆっくりと競うように浮き流れ、南側から北の方向（銚子方面）へ限りなく現れては消え、また現れる模様に「あれはなんだろう？？」と思いながら眺めた。

地上からはサーチライトが左右に交錯し、舞い上がった炎の燃えゴミがパッと消え、雨のように降りそそぐ光景は今まで見たことのない、綺麗な夜空の花火のようなシルエットに驚きながら夢中になって見とれた。

父に銀色に輝く物体はなにかと聞いたら、「あれは敵機だ！よく見ておけ！今東京は、家がみんな燃えて火の海だ！だから空が赤く見えるんだ。おそらくあの下では、大勢の人びとが死んでいるはずだ。お前の将来の為によく見て、しっかりと覚えておけ！」と諭された記憶は、今でも生々しくよみがえります。

毎年３月１０日の夜は、西空を眺めては思い出し「戦争反対！」と握りこぶしに力をいれて、家族や孫たちと戦争の恐ろしさについて話し合っている。　　２０２４年６月